

味の素食の文化センター研究成果概要報告書

<2020年度研究助成>

## 食を通じたマレー人、華人、インド人の融合の可能性を探る

マレーシアにおける三大民族集団の狭間に生きるプラナカン・イン  
ディアンの食卓から

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 柏美紀

2024年6月30日

<2020 年度研究助成>

## 食を通じたマレー人、華人、インド人の融合の可能性を探る

### マレーシアにおける三大民族集団の狭間に生きるプラナカン・インディアン<sup>1</sup>の食卓から

柏 美紀

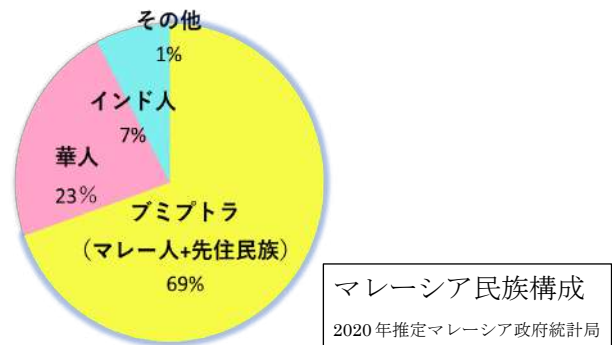
京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

#### 1. 緒言

イスラーム教徒が集うモスクの前で、彼らには御法度の豚肉を提供する飲茶の店が賑わいをみせている。ここは、マラッカ。15世紀以降東西交易の要衝として栄えた。多様な人々が行き交い、ポルトガル、オランダ、イギリス、日本と続いた支配の影響は、いまの生活にもたしかに息づく。1957年にマレーシアとして独立した後、イスラーム教、キリスト教、仏教、道教、ヒンドゥー教、シーク教など、多様な宗教を信仰する人々は「ブミプトラ」、「華人」、「インド人」という民族範疇に分類された。1969年には死者196人の犠牲を出す民族対立を経験したものの、それ以降彼らは目立った衝突を避けてきた。民族・宗教はしばしば対立の火種になるなか、彼らはどのように共生しているのだろうか。全ての人にとって欠かせない食事という実践に着目して考えてみたい。



地図



中国、インドをはじめとする様々な地域からの労働者の流入などによって発展してきたマレーシアには、安価で様々な料理を提供する食堂が数多く存在する。そこでは異なる背景を持つ人々どうしであっても、各々好きなものを注文して共食することができる。また店の形態にもよるが、持ち込みに寛容な場も少なくない。自身の食べたいものがその場で提供されない場合は、配達サービスを利用して自身の食べたいものを入手して共食する場面も見受けられる。これは学校における食事に関しても同様で、日本の給食のように皆で同じものを一斉に食べる機会は稀有である。

またマレーシアの小売店の多くは、国民の約7割を占めるイスラーム教徒が食することのできるハラール食品を扱う一方、一角にはノンハラールコーナーも設けるといった、双方を尊重する配慮もしばしばみられる。



多様な宗教を信仰する人々が集う食堂

では、家庭ではどのような工夫がみられるのか。宇高は、1990年代初頭からのマレーシア各地での現地調査を通して、人々は生活空間で緩やかに同じ民族が集住する界限空間を形成するなど、多様な文化的背景を有する生活者が異なる他者との間合いを調整し受け止めていると指摘する(宇高/2017)。

たしかにマレーシアでは民族が棲み分けることが多いなかで、異民族間の通婚もみられる。その場合、家庭内ではどのように共生しているのか。本研究では「プラナカン」(*Peranakan*)を事例として検討したい。

プラナカンとは主に、15世紀以降交易で栄えたマラッカに到来した商人と地元女性との通婚による子孫を指し、華人系、アラブ系など多様なプラナカンが存在する。とりわけインドから到来したヒンドゥー商人との通婚で誕生したとされるプラナカン・インディアンは、現代でも異民族間の通婚が多い。

プラナカン・インディアンに関しては、これまで「マレー人」、「華人」、「インド人」の文化を融合させた独自の祖先祭祀などが先行研究で明らかにされてきた(Dhoraisingam /2006)。また2023年にはレシピ本が出版されたが、家庭ごとに異なる日常の食事の様子は公表されていない。

## 2. 目的

異なる食の禁忌を有するものどうしはいかに差異を乗り越えて共に暮らしているのか、プラナカン・インディアンの家庭での日常の食事に着目して明らかにする。

## 3. 方法

主にマレーシアのマラッカにあるプラナカン・インディアンの集住地区内外や、そこから首都や隣国シンガポール等に移住した彼らの家庭、ヒンドゥー寺院をはじめとする様々な宗教施設等で参与観察・聞き取り調査を遂行した。さらにレシピ本等の文献収集も実施した。

調査期間は2022年7-10月、2023年1月、2023年7-9月の8ヶ月である。

## 4. 結果

本稿では、筆者が滞在した複数のプラナカン・インディアンの家庭のうち、3つの家庭の1日の食事の場面の例を提示する。

### 4-1. マラッカ集住地区内のAの家庭

家族構成は55歳のA(非肉食)と、その64歳の夫(糖尿病)、25歳の次男、20歳の長女である。既婚の長男は首都在住である。全員肥満のため栄養士の指導を受け、かつヒンドゥー教徒である。家庭内でAのみ非肉食(動物愛護と環境への配慮、肉に投与された薬剤が人体に与える悪影響の危惧を理由として)。その為Aは寺院の供物(菜食)のお下がりや、肉を家族にあげて残りを食べたりする。

以下1日の流れ(喫食時刻:食べた人:食べた物)。

7時:A:オートミール

8時:夜勤明けの次男:屋台でナシレマツ

ナシレマツは約40円で、ココナッツミルクで炊いたごはんにチリソースや小魚などを添えた国民食。卵が苦手な次男は卵を除いてチリを増やしてもらった。このように屋台の食事は安だけでなく、客の要望に柔軟に対応してくれることも多い。



ナシレマツ

(<https://services.osakagas.co.jp/portal/c/contents-2/pc/asagohan/029.html>)

9時:夫とA:チーズと全粒粉のパンとサラダ

13-15時の間4人がそれぞれ都合の良い時:父方のおば(華人で仏教徒)が作った豚料理や結婚式の残り物の中で各自好きなもの

20時:4人:お昼の残りや道教寺院の供物などから各自好きなもの



供物のおさがりなど

21時:長女、幼馴染の友人らと屋台へ。イスラーム教徒と仏教徒は屋台の料理、長女は自宅から持参した水、ヒンドゥー教徒は宅配サービスを利用して菜食用の食事を持ち込み談笑。その後彼らがAの家を訪問したため、Aはハラールの菓子を提供した。

## 4-2. マラッカの集住地区外のBの家庭

78歳のBは夫と死別し、既婚の子供3人は国外に暮らすため一人暮らし。糖尿病。ヒンドゥー教徒だが、他の宗教施設の前も通る度に祈る。

以下1日の流れ、主語はB。

9時:隣人のキリスト教徒に借りた調理器具でイドゥリというインド系の軽食を作り、出来上がったものを少し渡してお礼。

豆や米由来のイドゥリ



12時:豚肉の代わりに鶏肉で中華料理を作る。Bは豚肉が好物だが家庭内には持ち込まない。

13時:友人に注文された伝統菓子をYouTubeでレシピを確認して作る。足りないハーブを近所のイスラーム教徒の庭で貰い、御札に果物を渡す。宗教を問わず食べられることの多い果物やハーブは、異宗教間の関わりに役立つ。

サゴをバナナの葉で包み蒸す



15時:初対面のイスラーム教徒が訪問、食器の共用を避けるためパック入りのジュースでもてなす。

19時:ヒンドゥー寺院の供物を食べる。



ヒンドゥー教の神々への供物のおさがり

20時:近所のイスラーム教徒が砂糖をもらいに来て、その後出来上がった菓子を持って来る。

## 4-3. 首都近郊に移住した高所得層のCの家庭

Cは42歳でヒンドゥー教徒、夫は45歳でキリスト教徒、11歳の長男と暮らす。以下1日の流れ(喫食時刻:食べた人:食べた物)。

7時:C:ロールケーキ

9時:夫が市場で調達したカニとナシレマツを持って帰宅、自宅でナシレマツを食べた後出勤

C:自宅でのリモートワークの合間にカニの調理  
インドネシア人でイスラーム教徒の家政婦にハラールの菓子を差し入れ

11時:長男:クロワッサン

13時:夫がインド系ヒンドゥー教徒の同僚を連れて帰宅し、Cが調理したカニ料理を一緒に食べる。

Cはカニが苦手な為、出勤途中で同僚と外食。

15時:長男:スマートフォンをみながらカニ料理

17時:長男とインド系キリスト教徒の家庭教師:米粉由来の伝統菓子

19時:Cが帰宅、配達サービスで注文したチャーハンとピザと焼きそばを3人で食べる。

## 5. 考察

本研究の目的は、異なる食の禁忌を有するものどうしはいかに差異を乗り越えて共に暮らしているのか、プラナカン・インディアンの家庭での日常の食事に着目して明らかにする、というものだった。

まずプラナカン・インディアンにとって異宗教間の通婚は珍しいことではない。しかし、今回の調査では、イスラーム教徒とそれ以外の者が家庭内で同居する事例は今回みられなかった。この背景には現代マレーシアにおいて、非イスラーム教徒はイスラーム教徒と結婚する際、*Masuk Islam* (イスラームに入る/改宗)しなければならないことと、都市化などによって進行する核家族化があると考えられる。ただしイスラーム教徒とそれ以外の人々は、同居はせずとも日常的に関わる機会が多い。隣人や友人との付き合い、イスラーム教徒の家政婦の雇用など、家庭の往来は盛んで、食の禁忌への対応を心得ている。例えばイスラーム教徒の訪問を受ける際は、ハラール食品の提供、さらに食器は共用を避けて使い捨てのものを用いるといった配慮が自然とできる人が多い。

また皆が常に厳格に禁忌に基づいて行動しているわけではない。同じ宗教を信仰する者であっても、どの程度敬虔で何を避けるのかは、個々人、ま

た状況に応じて変化する。例えば道教徒で、たまねぎを含む五葷を口にしない女性は、ヒンドゥー教徒の夫との結婚後、マレーシア料理で多用されるたまねぎを食べるようになった。しかし道教徒のみの自身の実家を訪問する際はその禁忌に従う。

また家庭料理にはハラール認証をはじめとする指標がないうえ、食材や調理の様子が十分に把握できないなかで食事することになる。その際の鍵となるのは信頼関係と敬虔度だ。例えばBは家庭に豚肉などを持ち込まないため、ハラールの食事を提供することが可能である。Bはイスラーム教徒の訪問を受けると、その状況を説明しつつ、訪問者の敬虔度を確認する。相手の信頼が得られると手作りの食事を提供する。またAは、家庭を訪問した馴染みのイスラーム教徒を菓子でもてなしたが、最近敬虔になった訪問者がそれをハラールか否か尋ねたため、Aは不機嫌になった。Aは当然のようにハラールの菓子を用意していたが、信頼されなかったことを不満に思ったという。しかしその後も両者は日常的な交流を続けている。このように互いに探り合いながら共生している。

日常の家庭料理のレシピは、家庭外でも働く多忙な母に習う機会が乏しく、隣人をはじめ様々な人に聞いたり、高齢者も含めて全員が所有するスマートフォンで検索したりするなど、日々の工夫のなかで編み出されている。野菜を茹でると流れ出てしまう栄養素があると聞くと、茹でる代わりに炒めるようにしたり、健康のために油の量を減らしたりするなど、調理法もその都度変化する。そして彼らは宗教以外にも、嗜好、体質、アレルギーや倫理観など、個々人に応じた対応を可能な範囲で実現させている。筆者も彼らの家庭に滞在していると、水ひとつとっても、時間帯や体調に応じて温度を調整する習慣がついた。

これは、食材や量、盛り付けの位置まで細かく定められ、それに忠実に従いつつ受け継がれてきた彼らの祖先への供物とは対照的である。

そして、家庭内での様々な食の選択肢を支える体制が整っている。まず安くて、客の要望に柔軟に対応してくれる屋台が豊富にあり、その料理を持ち帰ってくる。また核家族の場合は近隣で助け合ったり、それが希薄化した都市部の富裕層は家政婦を雇用したり、配達サービスを利用したりしている。そして少なくとも今回の調査では、寺院の供物をいただくことが一般的であった。こうし

た背景もあって、皆が一緒に同じものを食べるよう強いられる機会はなく、各々がそれぞれ都合の良い時に好きなものを食べていることがわかった。



年に一度祖先に供える食



多様な人々が集い供物を共に調理

以上のことから、都市化、核家族化のなかでも、隣人、友人、家族間などの民族や宗教を超えた密接な交流がある。互いに探り合いながら差異を尊重しつつ信頼関係を築き、食の禁忌への理解、柔軟な対応が習慣となっている。彼らにとって差異の尊重は煩わしい義務ではなく、負担にならない程度に適宜妥協しつつ、他者を思いやる延長線上で日々実践するものである。つまり、民族間の差異は乗り越える障壁ではなく、尊重する対象となっており、それを支える食の体制が整っていると考えられる。

## 6. 今後の課題

今回の調査は、プラナカン・インディアンを主な対象としたため、今後はそれ以外の人々、特にイスラーム教徒である「マレー人」の家庭の様子も探りたい。また今回は「華人」が比較的多い地域を主な拠点として実施した。マレーシアは地方ごとに民族・宗教の構成割合が異なっていたり、料理の特徴が異なっていたりする。今後は特にイ

スラーム教徒が多数派を占める地域など、他地域においても調査を実施したい。

さらに各々が好きなものを食べる食文化のデメリットとその改善策も検討したい。例えば日本貿易振興機構によれば、マレーシアは、ASEAN 諸国において子供の肥満率が最も高い一方、体重不足の子供も少なくない。この課題に対して政府は日本の給食制度を手本に、2020 年からマレーシア全国の公立小学校に通う小学生に、栄養バランスのとれた朝食を無料で提供することで、健康的な食習慣をつけることを狙うという(日本貿易振興機構/2019)。

また日本では外国人の支えが不可欠となりつつあり、ますます多様性を増す日本社会の食事の場面への応用方法も検討したい。差異の尊重が根付く社会は、移民にとってだけでなく、日本人にとっても暮らしやすい社会になるのではないか。例えば筆者は日本のアルバイト先で、皆同じ食事が提供された為に、アレルギーを有する人が全く食べられないという場面に遭遇した。これは、食事の提供者が複数種類を準備できない場合であっても、せめて事前に情報を提示することで、それを食べられない人はあらかじめ別なものを用意することができたはずである。

以上のように本研究を発展させていくことで、民族・宗教をはじめ多様な背景を持つ人々どうしの共食のありかたについて知見を深め、マレーシア、日本双方に貢献できるよう努めたい。

## 謝辞

新型コロナウイルスの影響で、海外調査の実現はおろか研究の継続すら困難であった時期に、本助成のご採択の通知をいただいた。このご恩に、今後は論文執筆等を通してさらに詳しく研究成果を公表することで、報いて参りたい。

## 参考文献

Dhoraisingam, Samuel. (2006) *Peranakan Indians of Singapore and Melaka: Indian Babas and Nyonyas--Chitty Melaka, Singapore*, Institute of Southeast Asian studies.

宇高雄志(2017) 『多民族〈共住〉のダイナミズム マレーシアの社会開発と生活空間』 昭和堂

日本貿易振興機構 (2019) 『2020 年から小学生に無料朝食を提供、日本の給食を手本に』 (<https://www.jetro.go.jp/biznews/2019/10/bc968c02ccb8ae6.html>) 2024 年 4 月 11 日アクセス